

57. 「友達ができる頃」～保育園の生活を通して～

2014.9.1 遠藤清賢

3歳から4歳にかけて、保育園での子どもたちの生活は劇的に変化します。遊びの内容や形態も大きく変わります。クラスの中で個々の子ども達は徐々に小集団の塊を形成し、集団での遊びが日常的に行われるようになってきます。ある程度、個性の似通った子ども達が集団を形成します。そこに入ることでできない子どもも出てきます。孤立した子は楽しそうに遊んでいる集団に入りたいと思いますが、自分から入りたいという意思を伝えられないとか、集団がその子を受け入れることをしないこともあります。時にはリーダーがいてその意思が集団の行動や遊びを決定し、孤立した子を受け入れるかどうかはそのリーダーの意思が尊重されます。その様子を見ていると集団で孤立した子どもをいじめているように見えます。ここで重要なのが保育士の働きです。保育士が仲立ちになり孤立している子をその子が望む集団に導くことや、集団の方から孤立している子を受け入れるようなアドバイス等をして、仲立ちの対応をします。3、4歳の集団は仲良く遊んでいたと思えば、ケンカをしている時もあり、多くの場合いざこざが絶えません。ある程度集団での生活が定着してくると、同じ目的を共有する集団ができます。作品を作るとか、虫を探すとか何かを成し遂げるために自然に子ども達が協力する集団です。この集団は目的が同じであれば誰でも入ることができ、構成人員は決まっています。臨機応変に集団は分解し、新しい目的が定まれば再び新しい集団が結成されるのです。主に保育活動では、子どもたち同士が協力しての作品作りや、調理体験等、故意的に目的を持たせ、新しい仲間や良い関係性を形成できるように保育を行います。このような集団生活の中で今まで一人での遊びが主であった子どもたちは、保育士によって自分という存在を考え、自分はどんな子どもなのかを自分なりに想像し理解できるようになる体験や保育環境を設定してあげるのです。その中で楽しいこと、悲しいこと、寂しさ、憎しみ、思いやり、優しさ、様々な気持ちを体験し、他の子の気持ちが想像できるようになり、どんなことが良いのか、何がいけないのかが判断できるようになるのです。私たち大人は子ども達に、優しい心、楽しいこと、苦しいこと、つらいこと、生きるために大切なことをしっかり伝え続けてあげなければなりません。私たち大人は、命の尊さを絶えず念

頭に置き、それぞれの立場における子ども達の気持ちを受け取り、理解し、共有し、たとえ良くないことであっても心から許し、励まし、子ども同士のお互いの心が理解できるように環境を整え体験の機会を提供することが大切です。保育園や幼稚園での集団生活の体験が子ども達を大きく成長させます。そして、就学前に、お互いが自分の友達であることを確認できるようになるのです。そして友達は家族と同じように自分にとって大切な存在になるのです。この体験によって、子どもたちは大人になった時の人間関係の基礎が育まれるのです。



《五目豆》(こども5人分)
大豆水煮 50g、人参 50g、
ごぼう 50g、鶏肉 50g、
油揚げ 1/1/2 枚、

①
砂糖:大さじ1、醤油:小さじ2、
みりん:小さじ2

《作り方》

1. 人参、ごぼうは皮をむき1cm角に切る。
鶏肉も同様にする。油揚げは千切りにする。
2. 鍋に、人参、ごぼう、鶏肉と水(適量)を
入れて一煮立ちさせる。油揚げと大豆水煮、
①の調味料を入れ味がしみるまで煮る。

